

淨度三昧經とその敦煌本

牧 田 諦 亮

一、

淨度三昧經の名は、すでに梁の僧祐（四四五―五一八）の出三藏記集卷四の、新集續撰失譯雜經錄第一に、
淨度三昧經二卷或云淨度經

と記し、また同集卷五の、新集抄經錄第一にも、

抄淨度三昧經四卷、淨土三昧抄一卷

と見えていて、早くから數種の淨度三昧經の存在が知られていたことが察せられる。

その譯者などについては、費長房が開皇十七年（五九七）文帝にたてまつつた歷代三寶紀には四譯を擧げている。同書卷九の、西秦北涼魏齊陳五錄には、昭玄統沙門曇曜の譯の一として、太武帝廢佛後の佛教復興の機運に感激して、和平三年（四六二）に、北臺の石窟寺内に僧衆を集めて、元魏淨度三昧經一卷 第二出、與寶雲譯二卷者同。廣略異耳。見道祖錄。北臺淨度三昧經一卷を出して後賢に流通し、法藏を住持して絶えることのないように願つたことを記している（同卷三参照）。

歷代三寶紀卷十の宋世錄には、三種の淨度三昧經を擧げている。

即ち、涼州の智嚴が元嘉四年（四二七）に揚州枳園寺で淨度三昧經一卷を譯出し、同時代に各種の翻譯に協力した涼州の寶雲（一四四九）は、智嚴譯と同本と思われる、法顯が西域から齎した梵本にもとづいて、これを二卷としてい

る。これが北方で曇曜によつて譯出されたという一卷本淨度三昧經とも廣略の差のみであり、道祖錄に見えていると註記している。さらに續いて、中天竺の求那跋陀羅（三九四―四六八）が元嘉十二年（四三五）に揚州に来て、寶雲・慧觀・法勇らの協力によつて、百數十卷の經典を翻譯しているが、その中に、淨度三昧經三卷があつたことを李廓錄に見ゆとして記している。

かくみると梁の僧祐は、失譯雜經錄に三種の淨度三昧經を記録しているのに、約百年後の歷代三寶紀には、廣略の差なりという四種（北一種南三種）の淨度三昧經を擧げていることになる。則天武后の天册萬歲元年（六九五）に明佺らが編集した大周刊定衆經目錄卷五には、以上の四經を併せ録して、單に四經同本別譯と記し、同卷十三の見定流行入藏錄卷上には、無量義經・菩薩藏經・造立形像福應經などとともに、淨度三昧經一部三卷を録し、現に中國で流布していることを記している。

この武周錄を、「雖云刊定、繁穢尤多、雖見流行、實難憑准」と極端に批判した智昇は、開元十八年（七三〇）に撰集した、開元釋教錄の卷十四に、以上の四種の淨度三昧經をつらね、

右四經同本異譯並闕。大周入藏錄中有淨度三昧經三卷。尋其文旨疎淺義理差異。事涉人謀、難爲聖典。故編疑錄、別訪眞經。

と記して、則天の時に現存入藏した淨度三昧經三卷を、開元錄卷十八の別錄中疑惑再詳錄に入れ、次の如く解説している。

淨度三昧經三卷（蕭子良抄撰中有淨度三昧經三卷。疑此經是）

ここにいう蕭子良（四六〇―四九四）は、南齊武帝の第二子である竟陵文宣王子良で、佛教外護者としてことに知られた。正位司徒・侍中として朝にあつた時、雞籠山の自宅に學士を集めて、五經百家の文を抄し、四部要略千巻をつく

り、また名僧を招致して佛教を講論せしめ、經唄新聲を造り、「道俗の盛なる、江左に未だ有らず」と傳えられている(南齊書卷四十)。子良はまたしばしば邸園において齋戒を營み、大いに朝臣を集め、衆僧の食事行水の事には、みずからその事にあたり、ために世上、その宰相の體裁を失していることを批評する者もあつたほどである。戒律を守れば沙門の身淨く、身口の七支諸惡を起さず、長養増進して菩提の善根ここに修習して成佛すること差うなければ、能く三世の佛種を紹續し得るとして、名づけた彼の編纂にかかる「淨住子」三十篇は、入聖の初門・出俗の正路として、戒を守るべきことを強調している(漢魏六朝百三家集、竟陵王集所收)。開元錄の編者は、歷代三寶紀卷十一に記す蕭子良の注經抄經總じて十七部二百五十九卷の中には、淨度三昧經の入つていないことを知つていたのであろう。自撰の開元錄卷十八には、四十三部二百九十八卷の蕭子良の抄經の名を擧げた後に、淨度三昧抄一卷を録し、さきの疑惑再詳録中の記載とは異なるものがある。

以上、諸經錄にあらわれた淨度三昧經について、その系譜をたずねたのである。かくて南方の三譯は殆ど同一本であることは、三譯者がそれぞれ關係を持つていることから推察される。北方の曇曜譯として傳えられたものについては、同時代の曇靖が譯出したという、かの庶民經典として著名な提謂波利經が、道宣によつて、「意在通悟而多妄習」と評されているが、曇曜が沙門統としての公的な立場からも、彼の譯した淨度三昧經が全くの僞經に類するものであつたとは考えられないのである。要するに、開元釋教錄編集の頃には、淨度三昧經は四經同本異譯闕本とされ、その頃現に流通していた淨度三昧經三卷は疑經として認識され、聖典としては扱ひ難いものとされていたのである。

二

すでに常盤大定博士の「後漢より宋齊に至る譯經總錄」や、望月信亨博士の「佛教經典成立史論」においてそれぞ

れ指摘されたように、この淨度三昧經は、齋戒を受持するものは善神の守護を得、六齋日八王日には特に如法に戒行を奉じ、かくして増壽益算し、死後まさに天上に生ずることを得べしとし、深刻な死に對する反省、現世における善行を説くものであるが、梁の寶唱が天監十五年（五一六）に編集した經律異相卷四九や、それを承けて唐の總章元年（六六八）に道世が編録した法苑珠林卷七・二三・六一・九七、五代後周の顯德元年（九五五）に編された義楚六帖卷一六などにもしばしば引用されている。寶唱らが用いた淨度三昧經が、出三藏記集卷四にいう、失譯雜經中の淨度三昧經であろうことは、ほぼまちがいのないことであろう。この外、隋の信行（五四〇—五九四）の三階佛法に、大集月藏經などとともに、淨度三昧經も引證され、道綽の安樂集卷下には、淨度菩薩經としてこの淨度三昧經の文が引かれているし、善導の觀念法門にも、現生護念増上縁を説明する中にも、佛告瓶沙大王以下の淨度三昧經の文を引用している。觀念法門に引用された淨度三昧經の文には、男女の佛教信者が月々六齋日及び八王日に齋戒を受持すれば、二十五善神の守護を得て、横病死亡災障なく、常に安穩を得ることを説くなど、明かに南北朝時代の偽經の特異性を示すものが見られる。大日本續藏經第一輯第八十七套に收められた淨度三昧經卷第一は、從來、淨度三昧經についての貴重な資料として知られてきたが、これは、現に京都大學附屬圖書館に藏する、藏經書院の續藏經出版のさいの底本となつた寫本についてみれば、

此經援引秋篠善珠僧正藥師經疏下卷 原本係法隆寺古寫經

とあり、大和秋篠寺の善珠（七三—七七七）の、現行の本願藥師經鈔卷下（日本大藏經本）には、僅かに淨土（度）三昧經の名を出しているにすぎずその事實を認め難いが、法隆寺に藏するという善珠の藥師經疏に記されていたものであるか。そうであれば、善珠の用いた淨度三昧經は、天平十二年（七四〇）に寫經所が淨土（度）三昧經二卷を書寫したことが大日本古文書卷七にも記されていることから類推しても、日本にこの經がもたらされてからほど遠くない時のこ

とであり、またこの經を疑經なりと斷定した開元釋教錄の成立（開元十八年、七三〇）から、わずか十年を經過してゐるに過ぎない。おそらくは、中國で、すでに疑惑の經典とされていた淨度三昧經が、日本に伝えられたのであろう。

かくみれば、今日の續藏本淨度三昧經が、たとえ三十地獄と地獄主を説明する中に、經律異相では、「平胡王、典主阿鼻大泥梨」とあるのを、「平胡王、典主阿鼻摩訶泥梨。中有大釜、淮廣縱四十里、其深亦爾、罪人滿中。但坐殺生姪盜不孝不忠」と擴張解釋し、いかに荒唐な俗信によつて佛説の名を恥かshめてゐるか、その理由も容易に察知されるのである。續藏本淨度三昧經や、その他の多くの佚文を集成して比較検討を施さねば、淨度三昧經についての基本的な見解を云々することは許されないし、また道綽（五六二—六四五）の安樂集卷下には、信行なども引用している大集月藏經とともに、壽命の長短を明すなかに、淨度菩薩經を引用して、

人壽百歲、夜消其半。即是滅卻五十年也。就五十年內、十五已來未知善惡、八十已去昏妄虛劣、故受老苦。自此之外唯有十五年於中。外則王官逼迫、長征遠防、或繫在牢獄。內則門戶吉凶、衆事牽纏、煢煢忪忪、當求不足。

人生及世間、凡經一日一夜、有八億四千萬念。一念起惡、受一惡身。十念念惡、得十生惡身、百念念惡、受一百惡身……

というが、これもその思想からみれば、淨度菩薩經とは淨度三昧經を指すものであろう。續藏本などでは淨度菩薩の名を見出しがたいが、敦煌本淨度三昧經では、明かに佛告淨度大士などの句を見るのである。

三、

スタイン蒐集敦煌古寫經中には、淨度三昧經の卷上、首尾缺（S. 4546）・卷中、首部殘（S. 5960）・卷下、首缺（S. 2301）の三種がのこされている。

卷上は、ジャイルズの目録 (No. 5483) によれば、全長九・五フィートの六世紀頃の古寫經である。三種の敦煌本淨度三昧經の中では書體は最も古いように思われる。これは、偶然にも、續藏經所收の秋篠善珠の藥師經疏援引のものによつたという淨度三昧經卷一の文に符合する。遺憾なことにその首部を缺いて、續藏本の卷一の前半を全く失つてゐる。即ち續藏本 (一の一八七ノ四) 二九七丁の表、上段六行目の珍琦雜寶から始まり、かつ續藏本は二九八丁の裏下段、地獄の三十王を説き終つて、卅 (續藏本は卅) 王所持如是と結んでゐるが、敦煌本はこのあと、八王が六齋日に使者をして善惡を簡閑せしめることを説く (經律異相卷四十九、大正藏卷五三・二五九頁下) とことや、人の殺盜淫兩舌酒の五惡を禁止する五官を設くところなど、約四十行 (約十七字語) を續けて、以下を缺いてゐる。してみると、現行續藏本は、なお數十行の殘缺のあることが知られ、また、敦煌本によつて續藏本の誤字缺字の補い得るものも多く、ここにまた、善珠ののこした淨度三昧經は、一二〇〇年のうちに、はからずも敦煌本との校合によつて、より完全なものとなることができざる機會に恵まれたこととなるのである。

卷中の方は、

佛說淨度三昧經卷中 佛言三界顛倒甚了理非阿羅漢辟支佛……无數或尊或卑或貴……女或女爲……

右の首部數行經題とも三十七字を存するのみであつて、もとよりその教説を窺い得ないが、しかもこの經が庶民の生活に直結したものであることは、この殘された三十字足らずの文からも察することができる。

卷下は、その書體は卷中よりも古く、後出の全文に就いて見らるるとおり、その首部を闕くが、ジャイルズの目録 (No. 5149) によれば全長二十三フィートに及ぶもので、おそらく首部の若干行を佚したものとみられよう。

淨度三昧經の名は、卷下に見られるように、淨度大士が佛との間にかわした、清淨齋戒を如法に奉行することによつて得福得道し、人に自度する所以を説いた教説から出ている。この三種の敦煌經が果して一具のものであるか否か

については、なお明言し難いものがあり、この中の卷上と卷下についても問題は存する。

いま、私は、経律異相その他の中國の佛書に見える淨度三昧經の佚文・續藏經本淨度三昧經・敦煌本淨度三昧經について、比較検討する紙幅を持たないので、その根本的な究明は他の機會に譲らなければならない。

この敦煌本淨度三昧經卷下が、その書寫の年代についてみても、おそらくは唐以前のものであり、謹嚴な書體であることから、文化程度の高い中原地方での寫經ではなかつたか、すくなくとも敦煌での書寫でなかつたと斷定することは誤りではなからう。しかも、その文辭は頗る出色であり、譬喩は、醜惡目をおおわしむるようなものではなく、きわめて高尚であるが、おそらくは、敦煌本淨度三昧經卷下は曇曜（譯とはいえなくとも彼が諸經にもとづいて、さらに時代的な感覺をもちこんだもの）のそれではなく、續藏本とともに開元錄に指摘するような、疑惑再詳録中のそれではないであらうとの疑問も生ずる。しからば寶唱が経律異相に、信行が三階佛法に、引證したような淨度三昧經の佚文の一つについても、當然慎重な検討が行われなければならない。いまはしばらく淨度三昧經の系譜の概略と、スタイン發見の淨度三昧經を紹介するにとどめたい。なお、陳垣の敦煌劫餘錄には、北京に淨度三昧經の殘缺本四種（結63・結65・長2・霜51）のあることを舉げており、スタイン本（S 1000）の佛性觀についての諸經要文抄とも稱すべき斷簡にも、他に見ない淨度三昧經の佚文を見るのであつて、敦煌古寫經の緻密な研究によつて、將來まだこの經の佚文を發見し得るであらう。いずれにせよ、かの提謂波利經と同じく、この淨度三昧經は末法意識のさかんな六朝後期頃に、ひろく中國に行われ、ことに北方の佛敎界の指導者信行・道綽・善導らによつて引用され、十往生阿彌陀佛國經などとともに、庶民經典として、六朝隋唐の中國社會における佛敎敎義の受容と變貌の問題を考察する上に、貴重な資料を學界に提出したものだといわねばならない。（後出の敦煌本淨度三昧經卷下の、本文・句讀の嚴正についてはなお後述をまたねばならない。諸佚文を綜合して「淨度三昧經の研究」とする豫定である）

佛說淨度三昧經 卷下

(首 缺)

……意耳。為佛弟子棄親……洗去垢勿遺。其餘作後世緣愍……

親敬明師。穢者當依附勇健者。病者當依附強彊健者。無目當依有目。蹇者依有脚。蹇欲行賈當依有本者。人民依沙門。沙門依佛。佛依人民。人民依仰沙門。得若干種福。亦不可得道得福。得道與持佛身正等不異。

佛告淨度大士及四部衆。道尊且遺。道以為清白為首領。梵行為道信。齋戒清如水月。是道之性。若有不堪任清淨戒者。不當自強欲入海洗除衆垢。竟未洗浴而溺反死。弟子中有不能守護經戒身口意者。不當強入弟子輩中。更相染汙與共同利者。罪同一等。慎之則有福。

淨度白佛言。世尊弘演大慈愍傷衆生。盡度一切十方諸天人民三塗之屬。莫不過度者。今復為未來者垂教訓化。後生恩深覆。蓋願化如來無量覺。

佛告淨度。一切諸天人民欲自度故。乃受佛教戒如法奉行。依佛慧自得福得度得道。佛實不度人。人自度耳。

淨度白佛言。佛開甘露門。演六度無極四禪四諦四等。大慈令一切依慧施行六度。莫不勉免難度脫生死者。

佛說淨度。尊法如我目所親見。不可計百千之衆。莫不從佛得度者。

佛告淨度。如汝所言。一切依佛三尊。佛授與經戒盡可度之。若有愚人。作惡甚健。不受聖化。佛說萬章。罪人不信不受。佛不能強度。若復有宿惡之人。多罪少福。不憂死後押入惡道。但念治生。四出求利以爲家業。給與妻子。齋日不肯入塔寺受齋。亦不念作福施。導師教戒語之。罪人端自謂爲是。語師言。道是我心中。戒與法亦是我心中。佛亦人。師亦人。我亦人。人相似。有何異。多辭云々爲也。

佛告淨度。如是輩人。心無恭怯。億佛不能療。何況一佛。是故人爲自度。佛不度人。

淨度白佛言。何等人聞教卽奉行。自憂後世。何等人聞教不奉行。亦不憂後世。

佛告淨度。人從三惡處。罪未竟。大慈菩薩。若師屬救因假來出。寄生休息。惡鬼常守護。恒使其人中注殭愁念。爰怒惡性巨觸近。其人不自觉知。但知目前一世事。不知恒爲獄杖鬼司守不置。邊人以知行違道檢其人。故謂行足。自許以道。死墮地獄。甚可感傷。人從三善處來生。聞教卽奉行。乃能自憂。求度世道。

淨度白佛言。人從三惡處來生者。爲無反復。龍戾難化那^耶。佛言。如是人。從三惡處來生者。惡心未歇。麤強意未滅。不仁無義。骨^肉穴相疏。不好學問。妬賢嫉能。證入人罪。語欲得勝。人不肯奉行齋。師父呵語。欲使順戒奉法。

其人言。戒法在我心中。我心中恒念佛及師經戒。行坐臥起不去心口。復欲使我爲耶。師曰。九齋日何不詣塔寺齋戒耶。其人言。我非沙門。何必塔寺一月持六齋。一年之中廢家計百有餘日。寧可止不生活。

我知當爾者。我不受戒。亂我心不得生活。師曰。吾但欲使卿得脫惡道耳。不益吾身也。致吾何爲。其人言。寺中諸沙門。何以不盡得道去。故復與我曹相似。塔寺我舍復何異。道在我心中。不在塔寺。衆人得也。如是人輩。當知地獄家假使來小休息耳。獄鬼等守不置。其人不自知爲惡鬼所守。不知死後當入大涅槃中無有出期。

淨度白佛言。其人爲自知從涅槃來出。不自知從涅槃來出。復還入涅槃中不。

佛言。人在胞胎中端識命宿。欲生時。從迳道中到地。神識亂忘。失宿命不復識事。

淨度白佛言。吾我人未踐迹者。盲聾如群羊。不知今在何時。戀著妻子。積聚財寶。脩治園圃。遺與妻子。作罪求利。賤命重財。好得惡與師教作福。其人言。和上不知我曹。官私百端。這不能死。但道閑事。和上閑居。但思美食好衣。不知我曹。官私百事。不可諧活。家亦有役使。調發佛家當羗。亦復甚於官家。我受戒直爲更求役調。師曰。吾但欲度卿。自得後世福。福不可救罪。其人言。我交今欲餓死。妻子飢窮。無知者那知後世。凡布施之法自發心。乃爲福不在他人勸強也。

佛言。如是輩人。罪之所致。不受勸厲之諫。但自心慳急無信。死入地獄五毒治之。妻子財寶盡留世間。了無福救。受罪苦痛。無復竟。已悔言。我平生時愚癡。不知益作布施。不知益作衆善。悔不益持齋戒。悔已無益。

淨度白佛言。其人已脫地獄。來生爲人。不欲還入地獄。可得爾不。佛言。可得爾。當求明師。受佛五戒。行歲三齋月六齋日如法。益作福施。懃加散華燒香燃燈禮拜悔過。用師教令數々講論。從問度世

道。隨師節度。死不復歸三惡道。恣意所欲所生之處。常在福地。

淨度白佛言。其人地獄家假使來小休息。當還受餘罪。那得生福地。佛言。猶如大長者任獄囚出之。囚即知餘罪未竟。囚點慧不惜所有。依因長者廣作道地。後亦得脫。人亦如是。地獄惟有。除罪待之。其人依因三尊作功德。何憂不生善處。

蓮華淨薩菩白佛言。人已得爲佛弟子。如法清淨。奉持齋戒。自可長離三惡趣。行之既易。無所作爲。無勞煩。不損功力。閑居無爲。何有難于而憂三趣。我自憶念。從本無中。始出得爲人。常保三道。天。上世間十方佛前。至于今日。未曾更三趣。而衆生趣三惡寘路。何所志樂而受患害。

佛告蓮華淨。而衆生樂於六欲。爲色聲香味細滑所誤。猶如鷹師持一鴿捕數鷹。人亦如是。求六情利竟。未一歡樂。長夜受罪誅。貧富數已定。愚者謂可蓋智者任宿福。如稭有限量。春種多秋收便少。人之貧富皆由宿種。今不可力。世人不了是。貪求無厭欲求千錢利。未有百錢益。用十倍稍零落。歡曰。不足言憂惱甚大多坐。^生是入三苦。永於神路。

相淨菩薩白佛言。如何爲五戒相。何謂爲十戒相。何等具戒相。佛告相淨菩薩及諸會者。明聽。內着心中。佛言。守戒不犯。心口恒淨。不說師父短。不證入人罪。死々不犯戒。堅住須陀洹地者。五戒相十戒相者。謂捨世八事。稱記苦樂利裏毀譽。難動如地。禪求三脫與神同道氣同無真人地十戒相也。具戒相者。樂戒閑居。節少行來。知足不求。少欲易可。慈愍衆生。如母愛子。欲令度脫。心住阿惟越致地。是具戒相。佛說是時。百萬菩薩得不退轉。五十萬比丘得三萬三昧門。十億天人發無上正眞道意。

八萬士女皆得道迹。

長老摩訶迦葉·迦旃延·摩訶目犍連·須菩提·舍利弗等五百弟子。離坐頭面作禮長跪叉手。同時白佛言。何謂爲淨。何謂爲不淨。

佛告諸弟子。不持戒者爲淨。何以故。以淨不爲諸情動外不入內。內不著外用不著故爲淨。以淨故。故不持戒。不淨者持戒不淨故。持戒檢諸情使向本無本淨。是故持戒者爲不淨。

縛色長者聞佛大會廣度諸天人民雜類尊天釋梵。盡共會坐。長者有五百美女。甚重愛之。常以嚴飭諸女。如待賓客。拔以自虞樂。不離食息。妒心在內。欲留美女。情中不能離。與欲俱行。恐衆人觀。狐疑不決。佛威力不致。即將五百美女俱至佛所禮拜揖讓畢訖。就坐而坐聽。佛清化殊非流俗所用。其事盡反。長者意疑離坐禮佛足。叉手長跪。白佛言。色者光目曜身。人之所尙好。聲者悅耳之意。忘憂患。色聲細滑最是天下快樂之本。佛皆反之耶。

佛言長者。就坐諦聽。內着心中。佛言。五色令人自盲愛色本望令人無色。恒爲嬌鬼所守。食瞰五藏。飲人心血。令人髓消腦騫。視聽不聰。老病速至。死入地獄。有何樂哉。五音陷耳。之誰。國家用之亡國破家。臣下用之亂朝失位。身危亡家。人用之男女多姪。破家滅亡。死入地獄。有何樂哉。

長者白佛言。天下人以何爲好。佛告長者。頭澤面帛。不爲好。面首端正。不爲好。細色好身形。不爲好。巧步行。不爲好。劫言綺語不爲好。心端意政。^正行合道化。死得生天。爾乃爲好。

長者白佛言。天下人何以爲樂。佛告長者。不謂藏積穢寶。行則車乘。坐則帷帳。美女恣情。飲食可

口。文祿服飭。衆伎自誤。坐呼立至。應心所欲爲樂。謂能奉持五戒十善行十法本齋四恩四等入八賢聖諦空無相願。死得涅槃。是謂最樂。長者聞經。欲垢漸薄。五百美女結解。發無上正眞道意。

爾時外復有豪族長者七萬人來。欲禮世尊前來。長者使人閉門言。內有宮人美女。外人聞此。有上妙婦女。欲來觀。我婦美女耳。我何爲將美女來用示衆。衆共觀我美女大城宮殿。佛化作竟。不能閉。門外長者衆通問得聽。便前至佛所坐中。長者語諸美女。皆伏地勿爲人所觀。諸妙首婦女盡伏地。

七萬長者禮佛畢訖。卽詣坐次而坐。於佛告先來長者。卿莫慳貪。迷惑女色。以心度他人心。以意度他人意。謂心等意同。乃復不爾。卿自謂。美女好無比。吾觀從頭至足盡醜。無一好。譬如革囊內滿不淨。身體骨幹皮塗血澆。皮覆以弊汗。露在內外。強以文飭幻人目耳。樂家縛獄貪世不斷。是種苦本。色妬害賢。禁止他人善心。死受重殃。

長者白佛言。婦女情貪爲他男子所觀。更相姪汗。遂種罪根。故禁之耳。佛言。正使人萬劫中熟觀美女。能使美女眉好損減不正。使男女俱相悅。色對共相視。身不相到。能有損益不耶。愛色增獄苦。離色無憂患。妻爲兩當子爲杻械。舍爲牢獄。財爲閉。是四爲地獄種。無著乃解。離愛則近道。近愛則增苦本。姪樂自纏縛。如蠶作繭。黠者能解姪縛。不姪除衆苦。心念放逸。行見姪以爲淨。恩愛意熾盛。從是造獄牢。覺意滅姪火。常念欲不淨。從是出獄牢。能斷老死患。愛欲自覆。蓋自蒸可情意自縛。詣獄門如魚入鈎口。爲老死所司。一日過去人命稍盡。譬如牽牛向屠。牛一舉脚稍近死地。可哀無救。人亦如是。寸蔭以過。人命亦滅。人生則有死對。強健則有病對。丁壯則有老對。四怨共居。苦皆

從。欲愛生一由愚痴。二由貪姪。三由瞋恚。除此三者。四怨則滅。無復生老病死痛。長得解脫無憂患。長者意解即得道迹。前受五戒爲清信士。愛結以解。獄苦以滅。死昇梵天。

長者告諸美女。吾已得道。意已離汝。從如所宜。吾不拘汝。五百美女皆得道迹。發無上正真道意。求作沙門。聖衆比丘僧皆不聽。此人大好。若爲沙門罪人不少。長者聞五百美女發意。亦甚歡喜。長跪叉手。白佛言。願垂大慈聽爲沙門。五百美女人解身瓔珞珠寶。散佛及菩薩大弟子上。化成寶蓋。其一寶蓋下有一化佛。佛皆言聽爲沙門。於是五百美女人頭髮自然墮袈裟便着身以成沙門。其女歡喜化成男子。皆得阿惟越致。五百沙門遶佛七匝。頭面禮佛足下。並大弟子衆報恩以訖。歡喜和顏悅色。叉手長跪。白佛言。請問四事所疑。若見聽者乃敢發問。

佛告五百沙門。自恣所問。佛當爲汝解釋所疑。五百新沙門俱同一念。白佛言。我等蒙佛重恩。今得過度。出於死地。還見四事人及鳥狩。身神一等。受形不同。狩着甲戴角鳥角作啄。我等何緣去女爲男。願釋所疑。

佛告五百沙門。諦聽。內著心中。狩所以着甲戴角。皆由宿命種行致之。前世爲人時。好著木屐入寺舍講堂及沙門房。死後入地獄。燒地熱如赤鐵。足到地皆焦燒。盡痛不可言。積數千萬劫罪之未盡。故使不死復入鐵叉獄。足行其上。地生鐵叉。利如剃頭刀。人走其上。斷足折骨。亦積若干億萬劫。罪竟從地獄中來出。復作着甲。狩戴角者喜着步棧華樹巾角持頭。誤觸人死。後入大鷲獄。鷲立人兩肩上。喙如鐵鉀。緣人頭髮骨食腦。積不可計劫。乃復得出爲戴角虫鳥。所以着角喙者。平生爲人時。喜口強

辭寬傳舌鬪兩盲。死入鐵鉀獄。獄鬼燒鐵鉀正赤。以落其舌。復燒鐵鉀正赤。鉀有三双。利如芒。獄鬼以拘々斷其舌。復以利刀捉其舌。細切如縷。舌這還生。復以犁耕之。復以燒鐵杵刻其咽中。罪過未盡。故不死。積不可計劫形竟得出爲鳥。以角爲喙。若說君主師父。其罪未殃。墮五不請。

佛言。所以於佛前去女爲男女者。惟昔定光佛之時。國中有一梵志字彌蘭。博學多智。國中儒學者。皆師仰之。梵志彌蘭常將五百弟子以爲左右。常脩梵行。時這講會菩薩過之。壹々解釋經中要事。令五百人各得開解。終日竟夜。門徒皆脫。菩薩捨之而去。後日同時俱見定光佛。佛授菩薩決。五百梵志亦發無上正眞道意。

爾時受前菩薩者。我釋迦文身是。爾時彌蘭者今長者優多羅身是也。爾時五百弟子者。今汝五百沙門是。惟脩梵行恣態不除。故受女形。宿師相遭結解。乃成男子。汝等五百人。却後十六中劫。當得作佛。號寶首如來至眞等正覺明行成爲善逝世間解無上士道法御天人師佛世尊。共同一字。國名妙樂。人民熾盛。但有菩薩衆無小道證。佛住世十六中劫。像法亦十六中劫。其時國中豐熟快樂。難量佛說。是時卅萬比丘得不退轉。四十億菩薩得阿惟顏。九十億天人皆得無所從生法忍。八千清信士求作沙門。佛卽聽爲沙門。十萬凡士七萬凡女。前受五戒。六十億清信女皆得柔順忍。廿萬比丘皆發無上正眞道意。二百萬天人亦發無上正眞道意。

恐畏長者白佛言。我身更是千痛萬毒已遍。今欲遠避之。何等爲五不倩罪。何等爲十不救罪。何等爲不竟罪。願佛加恩解說。

佛告恐畏長者。受持勿忘也。五不倩罪者。惡意向佛。破塔。壞佛像。盜三尊物。鬪亂比丘僧。證入師父罪。爲臣不忠。爲子不孝。弟子不謹慎。師爲弟子除殃滅罪。教去惡就善。恩倍於親百有餘分。然弟子不入深經律藏。濁眼觀其外。動記師過。若師有實事。弟子悔過。師爲呪願。其過得除。師實無事。弟子得罪。師惟以佛故。慈心療救。弟子模囚。以設不得攸。三尊極尊。度人無量。而誣謗之。父母生之膝下。推慘攘廡縲。慈感神祇。血化爲種乳。哺養育至其長大。教詣師等禮義成之。其恩重天地。而反背恩。不孝父母。君主爲印授之。王能令人尊貴。能使人貧賤。能殺人活人。而反不忠。天下有三火難事。何謂爲三火。一者佛法衆師。二者父母。三者君主。惟得歎其善。不可說其惡。罪成不可救。恐畏長者白佛言。君主父母師友有過。我欲諫之。云何。佛言。大善。欲諫者自可諫君及父母耳。惟爾當詳審其事。乃可諫師友。有可諫者不可諫者。已知得道者不論。未得道者有二輩。一者喜行來不畏禁戒。數見犯法者亦當詳審。審諦乃可瘳處。竊諫三過不正。當自引不直悔過而退。不得轉爲他人說。二者守戒畏罪。競々念道。出入尠少。不數犯禁。知是內無過缺雖時有過失。或欲誠人。或知人有過。不得道說。故深求佛意。歐和拘舍羅度人。是輩不可諫。但當自責。我曹弟子中誰有不如法者。願尊師當爲我曹多罪戾之人。療除罪辜。師曰。弟子盡未卽具香火。師問弟子。卿戒淨不。戒淨者燒香禮佛。言戒淨。懺悔而退。戒不淨者。首過如事說。師當教悔過。過乃除滅。不實萬劫罪不除。是爲五不倩罪。十不救罪者。一者貪無龐足。二者媿無龐足。三者瞋恚。難諫曉。四者愚癡。所爲無道。難與共語。語之正事。反引邪事爲喻。不信正法。五者嫉惡他人。六者增妬他人。七者主求人短。不自見過。八者禁

固人使不得聞經行道布施爲福。九者不信罪福。十者習惡不止。是爲十不救罪。五無竟罪者。一者殺生。心口念殺。受罪無竟。二者貪利。劫盜心貪意念。受罪無竟。三者姪嫉無能。受罪無竟。四者兩舌惡口。妄言綺語。傳舌相鬪。受罪無竟。五者嗜酒貪味。悖亂無禮。受罪無竟。是爲五無竟罪也。

恐畏長者白佛言。人處世間。甚爲危險。度世大難。我甚憂怖。雖有行作沙門。閉房自守。不豫外事。惟不得道足勉苦地。我今年過。妻兒累重。情中戀々。生相棄復劇住家。衆罪日滋。云何自度。

佛告恐畏長者。汝乃能自憂度世道能滅。我憂何甚快。汝今遇大福。得遭值佛世。尙復可耳。乃復得聞淨度三昧。其福功德無以爲喻。十方須彌山段々解。稱量可知。斤兩銖數十方。各十方恒沙佛刹。海水可量知。斛升升合數其聞。是尊三昧歡喜奉行如法者。其福尊無比。是皆非凡夫人。行如中事。不失毛分者。尊過十方天上世間德無能與等者。如莫憂行者得度。惟不能出家作沙門。居家亦可脩道。堅持五戒行九齋。使如齋法。齋日詣塔廟受齋。蕩滌六垢。論講道化。求後世道。自可得度。何憂之不度耶。恐畏長者白佛言。我所居處。去王舍國五百里。遠田既無塔寺。亦無沙門。佛行度人不一處住。我食從卅餘人。我年憂老。或復小弱。不能遠道者。既到塔寺。行齋一日妨廢五日。所得既少。所損甚多。日月久長。於生意死處則疲厭墮落。續入惡道。當云何。

佛告恐畏長者。人身難得。度身急事。人來生時。不手將妻子來也。死去亦不可將去。我但非我。何況妻子。財且自憂身。身未度。那何度他人。自不能溷。莫負他人。入水兩死。水中自未能得度。戀念妻

子枯并不度。求道身中急事。男女各自當盡心敬意。不避艱苦。乃可勉難。自作自得。不與他人。計日疑難。若彼聚落。賢者少不能起。塔居沙門者。當棄頑闇之群。馳就賢者之衆。死兒可度。何況成人任誠者。八歲男十歲女可行千里。各自有脚。欲度身。不當自疑難。

恐畏長者白佛言。已解居聚。無佛弟子。但有俗人。我當從業移近善友塔寺。我自得其福。

阿難白佛言。是尊三昧度人。乃爾衆生之類有識之屬。莫不得度者。尊巍巍。諸經中最衆行之首。立道之元。百福之王。尊妙乃爾。名爲何經。云何奉行。

佛告阿難。是經名斷諸苦本。一名總持諸法門三昧。又名淨度三昧。度諸天人民鬼神龍阿須輪。下及三塗。莫不度脫。淨諸清淨三昧。故名淨度。過去諸佛。皆奉行是淨度三昧。自得佛。現在諸佛。從是三昧。自致得佛。當來諸佛。亦當學是三昧。從中得佛。當奉行。阿難。供養是三昧。復當過於六度。阿難。是經從生死大難中度衆生。恩重不可量。阿難。當念報恩。阿難。諷誦說是經處。魔皆愁毒劇。如一人一朝亡失妻子父母財產寶物。身復在牢獄。號哭愁毒如是。魔恒司便欲斷是法。當堅持之物爲魔得便。阿難。我滅度後。廣當爲一切諸天人民布露演說。令得度脫如我。今阿難。我周遍說法一人不度。終不捨去。阿難。我般涅槃後。末世時。人少有奉行經誠者。猗法界難名。設有奉法者。皆言此狂人耳。一日不作百日不食。云何不作。正使沙門萬萬未有能樂誠究竟者。

阿難白佛言。人道難得。已復爲人。復得聞法經誠。何故不精進。佛告阿難。有四輩弟子。無本心。故不精進。何謂四。一者家居貧苦。未受佛誠。冀望富樂。二者疾病來作佛弟子。趣求時利。三者強效

人。四者聞作佛弟子後。脫地獄可得生天。謂直一受戒後。得所願。不知行之委曲。是四輩人愚癡不曉。求後世濟神離苦。唯求目前事。其人既不精進。乍前乍却。反爲魔得便所向不偶。謂呼受戒反得其殃。不知自行。所致用無本心。

故復有四輩人。能替進心。一者畏三惡道。二者從人道中來。三者從天上來。四者從他方佛國來。便能精進。

沙門亦有四輩。無本心不承至法。一者避世間苦來作沙門。二者避官假來作沙門。三者不能得衣食。來作沙門。四者避病來作沙門。無本心故不能精進。亦不能免三苦。

復有四種人作沙門大精進。一者念生老病死痛。二者宿世沙門中來。三者天上來。四者他方佛國來。乃能精進。我涅槃後千歲欲末。若有沙門。若清信士中。有守戒者。精進如律行者。此非凡人。或是文殊師利。或維摩詰。或慧法大士。或甍陀想。或彌勒示現。沙門欲建立懈廢之人。清信士女中有能慙齋戒。死死不毀犯者。亦地方上士。或罪謫來生閻浮提。或因緣來生閻浮提利。亦非凡夫。

阿難白佛言。弟子於閻浮利五燒五毒之世。衆生之中。奉行淨度三昧一日一夜。其福何所爲喻。佛告阿難。若有菩薩。起七寶塔。滿閻浮利。作七寶講堂。一堂上。施設金銀水精琉璃車璫馬瑙珊瑚眞珠。作牀坐統繩坐具遍諸牀。塔上繒綵華蓋燒好雜香供養百劫其福寧多不。阿難言。甚多甚多。天中。佛言。不如活一人福倍多。阿難。不可爲比。活滿四天下人。不如自守一日。福倍復倍相去甚遠。不可爲譬喻。人能於是五燒毒燃之中。清清淨自守齋戒如法一日。其福隆盛轉身得度不久。

阿難白佛言。若弟子中有精進如法者。後自得度。可不須師。

佛告阿難。弟子精進惟足免難。非師不度。師爲重任。如人生無父母難名。又無所寄屬。云何名字之耶。

阿難白佛言。如佛言者。末世時。弟子皆共更相放效不奉律行。已爲廢棄。尙不能自度。何能度弟子。佛告阿難。人欲求度世道者。當求明師。譬如欲度海。當隱視船爲可住用不足。能到彼岸不。船師爲本。船師爲新來。船完堅師本。故師便可度無憂。船又不牢師復新來。如是者不可強度。當觀師戒行。宄不堪任我師不。我行可師意不。我中師弟子不。師有律行不。師法難易。我能堪任奉事不。我爲能持師戒不。若觀中師者。當恭敬如事神。當護師意。師爲我曹故勸苦。我曹亦不當於師有所愛惜。當知師姓所喜不喜。語不得觸師諱傷師意。肝意微限。後成大罪。慎之慎之。是爲求法。

阿難白佛言。末世人常不用正化。律行者少。國中無持戒者爲可止不作佛弟子不也。人身難得。一爾當更劫數云何。佛告阿難。經法所到之處時々往々有持律沙門。出繼佛種不絕。域中凡有若干億萬菩薩弟子。若干億萬清信士女。十方諸佛一日一夜各三時。放道眼。覆視諸天人民幾許精進。幾許不精進。幾許爲俗。幾許爲道。幾許爲惡。幾許爲善。佛知盡從五戒上至具戒入律行者。十方佛皆稱譽。受作弟子。不入律行者。十方佛亦自不受。是爲棄人耳。是故四部弟子。當念精進晝夜各三時。禮拜首過。惟不能日日三時禮拜。莫失齋日。勸脩誦講淨度三昧。信樂受持。衆垢漸少。心明意解稍近涅槃。若人布施萬億劫。不如一日誦誦是三昧。其德出被福上施萬億劫。心無解倦想不如讀。是經一竟。思議無量。

阿難。是經中有大尊天。神與是經俱。爾時四大天王自與官屬俱。白佛言。是經所在之處。我自擁護持經之人。第二忉利天帝釋與諸官屬俱。白佛言。若後有善男子善女人。執持經卷者。我自護是善男子善女人。臨天兜率天不憍樂天化應聲天梵天大梵天梵輔天上至不入慧天等。皆白佛言。若善男子善女人。信樂執持是經名者。我自護是善男子善女人。諸天結願已。各作禮而還。

佛告阿難。是經名所至之處。當令有五清淨。一者枰閑令清淨。二者掃灑令清淨。三者香火供養令清淨。四者讀是經當用鮮潔手巾。五者齋戒清淨無食勳新。是爲清淨。初聞是經者。心意不堅。魔喜亂欲斷是經時。若男子善女人。持異種不好語來聞。善男子善女人耳者不當受。當逆呵之。卿欲亂我意耳。受者魔以深入爲魔得。便知。是善男子善女人。不久得聞法聞。亦不能究竟以爲魔得。便以失善師意。師與弟子。以有毀瑕覺師案法行事。沙門欲得清淨無勞垢者。一時一從。則無塵勞。又則垢敬意以盡慢意以生兩不得福。俗人不知清信士女法。清信士女不知沙彌法。沙彌不知沙門法。展轉不相知。行事不能承用法教者。但種罪根俱墮惡道。不知早解後可無對。佛說經竟。諸天阿須輪鬼神龍王地獄官屬國王臣民四輩弟子不可計菩薩衆。莫不歡喜。作禮而去。

佛說淨度三昧經 卷下

